正　実

古今の軍の様態や会戦のやり方は多々あると云うけれども、奇正と虚実、これ以外のものではない。奇正、虚実を敵と相対して見るならば、その本質は勝負（勝つか、負けるか）の二つである。勝負の二つは将帥の心にある。それ故に将軍の心に千変万化の根源を巻き収めて、無為の極みに至るのである。将軍の心が無為にして博ければ、軍は自ら「実（充実したもの）」となる。軍が「実」であるときには、常に「正」である。兵が常に「正」であれば、進んだり止まったり、声を控えたり喚声を上げたり、「奇」も又自らその中に出てくるものである。

およそ兵勝の要は、正を先にし、奇を後にするものである。兵が「正」であることが定かでなければ、軍は「虚」となる。軍が「虚」であったならば、常にその陣は終局まで保つことができない。「正」というものは軍の全体であり、「実」は軍の全徳である。これに対して「奇」は便宜的な軍の妙用とでもいうべきものである。そうであるから、勝負吉凶は互いに縄を牽き合うように、我が吉勝を得れば、彼は凶敗し、彼が正実であれば、我は虚耗する。彼我共に実正であるようなときは、長期にわたり互いにその終局を見ることがない。あたかも壁を隔てた両月の如く、二竜の如しである。この時において対陣して畢竟(ひっきょう＝最終局面）の勝負を知ろうとしても、この勝負が天運の通と、時の消息と、勢の長短と、遅速と先後とによって替わってしまうものであるから、自ら工夫を費やしてこれを知るように努めなければわからない。外国や我が国の兵法家が著す書物は、ただ奇正をもって利変の用とし、虚実を敵に観るとしている。私が思うにこれは誤りである。これは、言うなれば、影の形に追随するような論説である。例えば、敵の戦力が一に対して我の戦力が二であるときは、一の戦力（部隊）の戦術を正とし、もう一つの戦術を奇とすると云い、あるいは前の部隊をもって正とし、後の部隊をもって奇とすると云い、あるいは前に向いている部隊を正として傍らから出てくる部隊を奇とする云う類は、皆その一端を論じているものに過ぎないのである。

戦とは全て「正を以て合し、奇を以て勝つ（『孫子』兵勢第五の語）」のである。奇正の窮まりが無いことは、環の端が無いようなものである。正は奇となり、奇は正となり、突然に往き、一瞬にして来り、往く地、来る地、兼ねて制するには及ばない。風が物にふれ、水が器に随って方円（四角形と円形）になるようなものである。勢いは敵軍の動きに随い、奇は両陣の間に出でてくる。これが為に固定した形は作らない。ただ敵に因って転化する。無為にして十分これに合致し、無心にして自ら妙を尽くすのである。これを以て奇兵の至極とすべきである。